

全史料協会長サロン(オンライン)第2回 実施記録

催しの名称: 全史料協会長サロン(オンライン)第2回

開催日時: 2025年4月22日(火曜日)19時30分～21時

ゲスト: 金 甫榮(キム ボヨン)さん

- ・ 所属・役職: 大学共同利用機関法人人間文化研究機構人間文化研究創発センター特任准教授
- ・ 話題: 金さんは、デジタルアーカイブ学会誌最新号に Archivemata に関するレポートを執筆されるなど、**デジタル化の課題**に積極的に取り組んでおられます。今回のサロンでは、金さんの仕事や専門について話をうかがいました。

特別参加者: 蓮沼素子さん

- ・ 会長サロン第1回のゲストであり、2022年の全史料協滋賀大会では金さんとともに**デジタル化分野の研修講師**を務められました。

開催方法: オンライン(Zoom)

参加要件・参加人数

- ・ 全史料協会員機関職員及び個人会員が参加できます。
- ・ 会員外の方は、**全史料協会員の紹介がある場合**に参加できます。
- ・ 参加者 18 人

音源記録に基づくやりとりの要約:

- ・ **開始と挨拶:** 辻川会長より開会の挨拶があり、年度初めの多忙な時期にも関わらず多くの参加者が集まったことへの感謝を述べました。
- ・ **ゲスト紹介と話題導入:** 辻川会長より、第1回ゲストの蓮沼素子さんも参加していることが紹介されました。前回のサロンが公文書システムの要件設定に関する勉強会風になったのに対し、今回はサロン風にゆったりとした会にしたいとの意向が示されました。ゲストの金甫榮さんが、蓮沼さんとの過去の滋賀大会でのデジタル化研修や、Archivemata に関するレポート執筆など、デジ

タル化の課題に取り組んでいることが紹介され、金さんの仕事や専門、問題意識について話を聞くことが予告されました。蓮沼さんからは、アーカイブ職員における電子記録への向き合い方について、金さんに質問したいという意向が示されました。

- **金甫榮さんの自己紹介:** 金さんより、理系出身であること、コンピューターサイエンスを専攻していたこと、教職への興味、日本語学習の経緯、東芝未来科学館での企業アーカイブとの出会い、渋沢記念財団でのアーキビスト・デジタルキュレーターとしての経験、デジタルヒューマニティーズへの関与、博士論文のテーマ(デジタル保存)、現在の人間文化研究機構での仕事内容などが紹介されました。異分野融合の重要性や、論文発表における文系・理系の視点の違いなども語られました。
- **質疑応答と意見交換:**
 - 辻川会長より、金さんの日本語学習やバンド活動(ロック)について質問がありました。
 - 東芝未来科学館でのアーカイブ経験について、資料の種類や作業内容に関する質問がありました。
 - 渋沢記念財団での「デジタルキュレーター」の役割について、当時の状況や業務内容に関する説明がありました。
 - デジタルヒューマニティーズについて、具体的な事例(渋沢栄一伝記資料のテキスト化、分析、可視化、写真への情報付与と市民参加)を交えた説明がありました。アーカイブ資料の適切な管理が、デジタルヒューマニティーズの研究においても重要であるという認識が示されました。
 - 全史料協大会でのデジタルをテーマとする研修について、基礎的な内容の必要性や、アーカイブにおける基礎知識の定義の難しさについて意見交換がありました。文系出身者が多いアーカイブ分野におけるデジタルへの対応の課題が指摘されました。
 - 蓮沼素子さんより、電子システムの使いこなしの難しさ、DX 担当者との連携の課題、AtoM の活用における試行錯誤について質問がありました。金さんより、自分で何をしたいかを理解すること、海外事例の調査、コミュニケーションの重要性、無理強いしないことなど、これまでの経験の中で感じたことが述べられました。
 - デジタルとアーカイブの両方に精通した人材育成の必要性について意見交換があり、金さん自身もその役割を認識していることが述べられました。

- 蓮沼素子さんと金さんの連携について、日頃からの相談や情報交換の様子が語られ、話し合える相手やコミュニティの重要性が指摘されました。
- 参加者の溝上卓也さん(TK 業務企画代表)より、デジタル保存インフラ・ストレージに関する課題提起があり、ベンダー情報の信頼性について懸念が示されました。JIIMA 主催のセミナー紹介と、今後の連携への期待が述べられました。辻川会長より、ベンダー情報の見極めの難しさや技術の進化について触れ、コミュニティの必要性が改めて強調されました。
- AtoM の活用事例について、参加者の平野泉さん(立教大学共生社会研究センター)と谷合佳代子さん(エル・ライブラリー)より、導入の経緯、運用・維持の課題、バージョンアップへの対応、ボランティアベースの限界、日本語翻訳の状況などが共有されました。辻川会長より、アメリカのベンダーによる AtoM 提供サービスの情報提供がありました。近畿部会・関東部会での AtoM 実習の計画も紹介されました。
- 金さんより、組織におけるデジタルキュレーション・アーキビストの活動と変化について、参加者の茂原暢さん(渋沢栄一記念財団)に質問がありました。茂原さんからはチャットにて、連携の重要性について共感するコメントが寄せられました。
- 辻川会長より、多様な知識を持つ人々の連携の重要性、情報共有の場の必要性、全史料協への提案奨励などが改めて述べられました。
- 参加者の松崎裕子さん、森本祥子さん(東大文書館、全史料協副会長)より、それぞれコメントがありました。松崎さんからは、金さんの活躍や連携の広がり期待する旨が述べられました。森本さんからは、様々な課題があるという認識が示されました(チャットにて)。
- 最後に、金さん、蓮沼さんより、本日のまとめとしてコメントがありました。金さんからは、アーカイブズと情報学を結びつける役割への意欲、情報交換の場の必要性などが語られました。蓮沼さんからは、コミュニケーションの重要性、相談できる人の増加、共有の場の創出への期待などが述べられました。今後のよりインタラクティブな場の設定や、関東での AtoM 講習への期待も示されました。
- **閉会の挨拶:** 辻川会長より、今後の活動への期待と提案の奨励があり、閉会の言葉が述べられました。